

---

---

## ロレンツォ・デ・メディチの宇宙論的自然観

### ——ポッジョ・ア・カイアーノ正面入口フリーズの解釈をめぐって

秦 明子（京都造形芸術大学）

---

---

ロレンツォ・デ・メディチ（1449-1492）は1485年、自ら構想したポッジョ・ア・カイアーノの新たなヴィラの建設を、建築家ジュリアーノ・ダ・サンガッロ（1445-1516）に命じ、その後、正面入口のロτζャ上部を飾るため、施釉テラコッタによるフリーズの制作をベルトルド・ディ・ジョヴァンニ（1420-1491）を中心とした数人の彫刻家に注文した。さらに翌1486年には、ヴォルテッラ近郊にスペダレットのヴィラを購入し、このヴィラの装飾を、当時フィレンツェで名声のあった四人の画家——ボッティチェリ、ギルランダイオ、ペルジーノ、フィリッピーノ・リッピに注文している。

ロレンツォは、その最晩年にあたる1480年代後半から90年頃にかけて、この二つのヴィラを装飾する一連の作品の制作を、自らが信頼する画家や彫刻家に依頼したことになる。これらの作品は、従来、各ヴィラの研究や画家のモノグラフのなかで個々に言及され、考察の対象とされてきた。ポッジョ・ア・カイアーノの正面入口を飾るフリーズもまた、図像の難解さゆえに、おもにその図像の分析と解釈に焦点が当てられ、考察が試みられてきた。しかしこうした従来の考察は、作品を取り巻く状況や、注文主であるロレンツォにとっての作品の意義を看過してきたように思われる。実際これまでの研究は、部分的に一致をみているものの、フリーズ全体の解釈については、「時の寓意」<sup>アレゴリー</sup>（Chastel,1959; Cox-Rearick,1982）として、もしくは「魂の運命についての神話」（Acidini,1991; 1996）として解釈するものと大別され、いまだ一致をみえていない。

そこで本発表では、二つのヴィラを装飾する各作品を、有機的な連関のもとに考察することによって、従来とは異なる見地からフリーズを捉えなおし、新たなフリーズの解釈を提示することを試みる。まず、二つのヴィラの装飾を、なぜ相互の連関のなかで捉えることが出来るのか、現在、当時の主題が明らかとなっている各々のロτζャ内部のフレスコ画の主題を手がかりに、一連の装飾が、ロレンツォ本人の思想に立脚した宇宙論的な自然観をもとに構想されていた可能性を考察する。以上の考察を踏まえ、ポッジョ・ア・カイアーノという広大な農地を有するヴィラの建築当初の意義を鑑みると、フリーズと、天上界を支配するユピテルとの関連が浮かび上がる。気象現象を支配するユピテルは、自然そのものであり、農作業に不可分な影響力をもつ神であった。本発表では、新たな典拠を挙げることによって、フリーズ中央に描かれた神殿が、ユピテルに捧げられたものであることを指摘し、フリーズには、フィレンツェとその周辺支配領地における、安定した平和の確立と、農耕の繁栄を望む統治者としての強い願望が表明されていたことを明らかにする。